

Bangladesh のバリ・ビティ (屋敷地) を 通してみた農村開発

吉野 馨子,* ムハマッド・セリム**

An Observation of Bangladesh Rural Development Through *Bari-Biti* (Home Garden)

Keiko YOSHINO* and Muhammad SALIM**

The *bari-biti* (home compound and garden) in rural Bangladesh is important for local people not only for producing fruit and vegetables but also for providing rural women, who are not allowed freely to step out the *bari-biti*, with prime living and working space. A detailed inventory was made of all plant resources of the *bari-biti* of Dakhsin Chamuria village. A "plant book" was edited and published in cooperation with the villagers, who have a thorough working knowledge of local plant resources. The authors learned, through a "home garden development program" advocated by an agricultural extension worker in the Thana, that the only kind of program likely to succeed would be one which enhances the indigenous "style and contrivance" developed by villagers through time-tested interaction with the environment.

Some closely-woven territorial societies of women were identified on the basis of living space, radius of daily life, daily interaction, and kinship and social relations. These territorial societies were used as the unit of communicating and disseminating information on rural development activities being undertaken by the JSRDE Project team.

I はじめに

筆者らが1992年以来小規模な農村開発プログラムを実施している、ジャムナ氾濫原に立地するドッキンチャムリア村(Dakhsin Chamuria: 以下、D村)の人々は、自分たちが住居を構え、日々の生活を営む屋敷地をバリ・ビティ (*bari-biti*) と呼んでいる。バリ・ビティとはバリ (居住空間) とビティ (高い土地) という2つの単語が合成されたもので、村の中で最も比高が高い土地である。

バリ・ビティは、氾濫原の自然堤防またはポイント・バーと呼ばれるような比高が高くなっている場所に、さらに人工的に土盛りをしてつくられている。D村では、ジャムナ川の分流で

* 農村生活総合研究センター; Rural Life Research Institute, 19, Ichiban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102, Japan

** Department of Agronomy, Bangladesh Agricultural University, Mymensingh, Bangladesh

あるロハジョン (Lohajan) 川からの溢水と集中的な降雨により, 雨季には屋敷地 (以下ことわりのない限り屋敷地とはバリ・ビティのことを指す) と土の道路以外は, 一面の湛水を受ける。例年雨季が本格的に始まる6月頃から耕地は湛水を開始し, 8月には最大となり1~3メートルの深水を見るようになる。それは徐々に引き始め, 11月の声を聞き, 乾季の訪れと共に湛水は消え去る。このように, D村の屋敷地は氾濫原の自然地形を利用してつくられ, 雨季においては「湛水をまぬがれる土地」と, 徒歩で自由に移動できる唯一の「生活空間」を提供している。

バングラデシュの氾濫原の村では, このように雨季の自然環境に強く影響されながら, そして, それに適応するために, 人々はバリ・ビティを形成し発達させてきた。バリ・ビティは集合してパラ (*para*) という集落の単位をつくるが, 筆者らの参加するJSRDE (Joint Study on Rural Development Experiment) プロジェクトに先行するJSARD (Joint Study on Agricultural and Rural Development) プロジェクト¹⁾からは, 農村開発計画を実行していく上で, このパラの単位を重要な村落単位として注目すべきである, という提言がなされている [河合・安藤 1990: 92-106]。バングラデシュにおける集落の形成過程については, 他にもSultanaのややマクロな視点からの研究もある [Sultana 1993]。

このような村落組織論的な視点とはまた別に, アグロフォレストリーの視点からのバリ・ビティの重要性が広く認められてきている。農業生産を高めるためにバリ・ビティ利用の活性化を図るプログラムや, そこがバングラデシュの農村女性の自由に動ける唯一の活動場所であることから,²⁾ 女性をバリ・ビティにおける生産活動に積極的に参加させることを目的にしたプログラムなどが多数の機関によって試みられている [De Torres 1989; Hannan and Ferdouse 1988; BARC 1991: 38-39; Abedin *et al.* 1990]。また, JSRDE プロジェクトにおいても, D村以外の各村でもさまざまなプログラムが実施されている。³⁾

1) JSARD プロジェクト及びJSRDE プロジェクトはともに国際協力事業団による研究協力事業として実施された。JSARD プロジェクトは1986年6月に開始され1990年6月に終了した。JSRDE プロジェクトは4カ年の計画で1992年6月から始められ, 現在も継続中である。

2) バングラデシュは現在イスラム教徒が約9割を占めている [BBS 1993]。バングラデシュ・イスラムの戒律では女性が家族, 親族以外の男性に姿を見せることは好ましくないとされており, これはパルダ (*pardah*: パルダはカーテン, ヴェールを意味する) として知られている。このパルダが女性の行動範囲をより厳しく制約している部分はあるが, 女性が活動の中心を屋敷地とし, その外に出る機会が少ないことはヒンドゥー教徒にしても同様であり, これはイスラム波及以前からのこの地域の慣習であろう [Aziz *et al.* 1985: 73-79; Chaudhury *et al.* 1980: 5-8]。

3) JSRDE プロジェクトでは各サイトで野菜栽培, 果樹栽培, 家畜飼養, 保健衛生等の各分野においてバリ・ビティ関連のプログラムが実施されている。例えば, オストドナ村 (Austodona, Comilla 県) では, デモンストレーション・プロットを通して乾季における野菜栽培の促進を行なっている [Jalil 1994]。フォニシャイル村 (Fanishair, Chandpur 県) では, パナナのデモンストレーション・プロット, 簡易衛生トイレ普及等の活動が実施されている [Mukai 1993]。また, アイラ村 (Aira, Bogra 県) では, とくに耕地をもたず屋敷地のみを所有する村びとや貧困女性の支援を目的の1つとして, バリ・ビティでの野菜栽培, 果樹栽培, 家畜飼養の促進に関するさまざまな活動が行われている [Firoz 1994]。

本稿では筆者らが直接参加しているD村の屋敷地を中心とするプログラムに焦点を当てる。本稿の目的は、これらのプログラムの実施事例を紹介し、バングラデシュの農村開発に果たすバリ・ビティの意味を、生産の場にしてかつ生活の場という多面的な側面から浮かび上がらせてみることにある。したがって、本稿ではまずD村の屋敷地についてその概要を述べ、次に各プログラムを記述する。ここで取り上げるプログラムは、以下の通りである。

- (1) 屋敷地を基本とする地縁関係に注目しての村の組織づくり。
- (2) 屋敷地の植物利用を村びと側から見た、屋敷地の植物の Plant Book 編纂。
- (3) 農業普及局 (Department of Agricultural Extension) の家庭菜園普及プログラム。
- (4) 村内調達による果樹苗木繁殖プログラム。

最後に、以上をまとめ、バリ・ビティが農村開発においてもちうる意味について考察したい。

II D村のバリ・ビティ

一面にひろがる水田とその奥に緑を帯びてこんもりと点在する集落は、ベンガル・デルタ低地の典型的な農村風景である(図1参照)。屋敷地に対応する用語は、ベンガル語では、バリ・ビティであるが、バリ (*bari*) と一言で表されることもある。しかしベンガル語のバリという言葉は多面的な意味を持ち、一言では日本語に訳しにくい。とりあえず村の中で人々の住む場所を指し、それを形づくる土地をバリ・ビティとしておこう。強いて説明を加えるならば、バリがそれを構成する住人及び居住空間を意識しているのに対し、バリ・ビティは屋敷地として用いられている土地への視点が強調されていると言えよう。



図1 耕地の中に点々と島のように見えるバリ・ビティ
1993年撮影

図2は、バリ・ビティ内及び隣接地域での植物、人々の住む家々の様子を、村内の1つの地区をモデルに俯瞰的に図示したものである。ここには19世帯が居住しており、隣り合った世帯の間には明確な境界がある。バリ・ビティは前述のように、耕地より数メートル高く土盛りされるが、そのために土を掘られた場所は穴となり、水を湛える池となる。しかしこれは池をつくるのが第一義ではないので、プクール (*pukur* : 池) とは呼ばれず、パガル (*pagar*)、またはドバ (*doba* : 水たまり) と呼ばれる。これらの池は水浴、洗濯やジュートの洗い場として利用されてきたが、近年は養魚池として注目されている。

バリ・ビティの高みからケット (*khet* : 主に稲や小麦、豆類などが栽培される耕地) まで下がる傾斜部分はダール (*dhar*) またはカチャル (*kachar*) と呼ばれる。カチャルを下りケットに入る前に、バリに隣接して細かく区分された耕地がある。この耕地はパラン (*palan*) と呼ばれ、ケットとは異なった利用がされる。パランは将来のバリ・ビティ拡張予定地でもあり、たいいていバリの居住者がそれぞれ自分のバリ・ビティの周囲のパランを所有している。また、バリ・ビティ内のある程度まとまった園地もパランと呼ばれる。パランとはもともとはこのバリ・ビティ内の園地を指すものであったのが、次第に拡大されてバリ・ビティの外にまで広がってきたのである。女性にとってバリ・ビティ及びパランまでが農作業の可能な範囲とされている。

バリ・ビティはいくつかの部分に分かれている。建物は母屋、調理小屋、家畜小屋、農具や燃料等を置く物置(農具は母屋に、燃料は調理小屋内に置かれていることも多い)、客用小屋等で構成されているが、これらの建物はある程度の広場を残してそれを取り巻くように建てられる。この広場はウタン (*uthan*) と呼ばれ、収穫後調製作業、燃料の乾燥作業等がここで行われている。母屋はバリ内の南や東向きに建てられることが多い。そしてその奥に調理小屋が置かれる。調理小屋から奥は藪(ジョンゴル : *jongol*) である。ジョンゴルには樹木、竹や草が生えており、便所はこの中につくられる。調理用の燃料から出た灰等もここに置かれる。また、バリ・ビティはウシ、ヤギ、ニワトリなど家畜の飼養される場所でもある。

表1 D村全体におけるバリ・ビティ所有の状況

	計	%
1. バリ・ビティ所有状況		
1) 全世帯数	538	100
2) バリ・ビティのみ所有する世帯数	100	19
3) バリ・ビティも農地も無い世帯数	21	4
2. バリ・ビティ面積		
1) 村総面積 (ヘクタール)	185.30	100
2) 村内バリ・ビティ総面積 (ヘクタール)	20.00	11
3) 平均1世帯当たりバリ・ビティ面積 (平方メートル)	371	

出所：全世帯悉皆調査 (リソースサーベイ, 1992年実施) 結果より作成。

III プログラム実施とそこからあらわれるバリ・ビティの果たしている役割

1. 農村社会生活においてバリ・ビティの果たす役割とその機能に注目しての隣組グループ(バリ・グループ)づくり

(1) バリ・ビティを基本とした村の地縁関係

表1はD村の全世帯のバリ・ビティ所有の状況をまとめたものである。村内で農地を持たない世帯は121世帯あり、バリ・ビティすらも持たない世帯は21世帯ある。⁴⁾ このうち8世帯は妻方の父のバリ・ビティ内に小屋だけ建てて住んでいる世帯であるが、これは婿取りというほど固定的なものではなく、就業の機会等、そのときの事情により夫方の父の家(バリ)と妻方の父の家を行ったり来たりする世帯が多い。夫方の父のバリ・ビティには未分配の相続分がある場合もあり、バリ・ビティをもっていないと簡単には判断できない。残り13世帯のうち9世帯は女性が世帯主の世帯である。彼女らの多くは夫と死別あるいは離縁した(された)ために、婚家から父のバリに戻ってきたものであるが、たいてい土地の相続権を兄弟に譲っているため、生家に戻ってきたときに正当な居場所を持つことができない。父親の存命中はまだいいが、その死後は兄弟やその他の身近な親類の好意にすがって生きていかざるを得ず、極めて不安定な位置に置かれる。それを避けるために、父親が存命中に娘の子どもたち(息子たち)のために土地を買ってやる例も見られる。

このように、自分のバリ・ビティを持つことは村で生活する権利を持つことを意味する。そこで村を離れて都市で生活しているような世帯も、村でのバリ・ビティは放棄せず所有したままの状態を保つことが多い。また、十分な広さのバリ・ビティが確保できない場合、皆が(具体的には息子たちの世帯が)とりあえず村の中に生活の場を確保できるよう苦慮する。前述のような夫の実家と妻の実家をそのときどきの経済状況によって移り住む居住パターンもひとつの知恵である。彼らは親の土地に小屋を建て、生計は別にする。そのようなやりくりが許容できるように、バリ・ビティはなかなか兄弟間で相続分配されず(バリ・ビティも耕地と同様に

4) 村の世帯は、村びとの自己申告に従って調理を別々に行なっている(家計が独立している)家族ごとに1世帯として数えられている。しかし村びとの居住パターンは多様であり、調理は父の家族と別になったが土地は相続していない、年老いた未亡人で相続分配されて息子のものとなったバリ・ビティに住んでいるが調理は息子夫婦と別であるために別世帯として数えられている、また本文にもあるが夫の実家と妻の実家の間を行き来している、などさまざまなケースがあり、これら世帯の所有土地は“無し”と申告されている。実際どこまでを事実上の土地無しとしてカウントすべきか苦慮するところであったが、本論文では、家計は独立したが土地が分配されていない世帯及び、夫が死亡し息子夫婦と住んでいるが家計は別である世帯は、土地無しあるいはバリ・ビティ無しとしては数えないこととし、この100世帯、21世帯の中に含めていない。

息子たちが——娘は通常権利を放棄するので——均分相続する), 親の存命中は親が所有者であり, 親の名で保管されることが一般的である。しかし親の死後も, 生計は別ながらバリ・ピティは分配せずに暮らしている世帯も少なくない。相続で生ずる争いを回避するようにその場をしのぐ一方で, バリ・ピティに隣接するパランを土盛りして掘げたり, 隣接世帯にバリ・ピティを売った金で耕地に以前より広いバリ・ピティを新しくつくるなどの努力が続けられる。

バリ・ピティを新しくつくる時は, バリ・ピティ用の土地面積に加えて盛り土調達のための土地 (予定しているバリ・ピティのサイズの3分の1ほどは必要) の確保及び, 盛り土のための労賃 (マティカタ; *mathikata* と呼ばれる土方集団に通常依頼する) の確保が必要とされる。新しいバリ・ピティづくりには1993年当時, バリ・ピティ1デシメル (約40 m²) あたり土地購入代1,000タカ, 土盛り労賃1,000タカ, 併せて2,000タカ (インタビュー当時1タカ=約3円, 参考までに日雇いの農作業労賃が約20タカ) かかると考えられている (土地の高低でその金額は上下する)。近年こそ池での養殖が盛んになり, バリ・ピティをつくることにより副次的にできる池の現金収入源としての価値が注目されてきているが, 新しいバリ・ピティをつくるということは, 一方で耕地の喪失を意味するのである。バリ・ピティづくりは生活の場を確保しなければいけないという村びとの重大な関心事である上に, このように大変な費用もかかることから, バリ・ピティの境界をめぐる争いなども頻繁に発生している。

新しい住居は, もとの住居のあったバリ・ピティや土盛りをあまり必要としない村の中の高み, 近年は交通の便利な道路横等につくられていく。分家による世帯の増加や, 生活の利便や安全のために新しい住居を隣り合ってつくっていくことなどから, 通常数世帯が固まって1つの居住塊が形づくられており, 各々の居住塊はそれぞれ呼称をもっている。例えば, 以前住人に教師がいた居住塊は“マスター・バリ (*mastar*: 教師),”耕地の中につくられた居住塊は“チョコレート・バリ (*choker*: 耕地の)”といった風に, その居住塊の位置, 住人の家系のタイトル, 職業などからつけられた名称がバリの頭につけられて呼ばれている。この呼び名は, そこに住む住人自身よりも, 周囲の村びとがその住人の居住場所を指し示すためのものとしての意味合いが強く, “住所としてのバリ”ということができよう。そのために, 同じバリ名で呼ばれていても, それぞれが違う場所からやって来て血縁関係はない等のいきさつから, その呼ばれている住人同士にしては隣近所という意識はあっても, 同じバリに属しているとは考えていないことも多い。一方, 同じバリに属しているという村びとの意識がつくるバリの範囲は, “自分のバリ”とも表現することができる。これは, 同じ父系の祖先をもち, なおかついまだに隣接して

5) グスティは同じ父系の血縁をもつとみなしあう世帯によって構成される集団であり, 結婚, ムスルマニ (*Mussalmani*: 男児の割礼式) 等の人生における重要な行事や争い等の解決において協力しあう。一方ショマズも結婚, ムスルマニなどの行事や, その他日常生活において火事, 盗難等の問題や, 争いが起きたときに協力しあう社会集団であるが, 1つの集団から他の集団に所属を変えることもあり得る。

いる世帯のグループを示す。隣接して住むという地縁関係と父方の血縁関係の双方の側面を持ち、村の生活における最も親密な関係をつくっている。

バリが集まってパラを形づくり、パラが集まって村となる。このような村の地縁関係において村びとに認識されているのが、その関係の度合いによって隣人、または単に知り合いという意味あいを持つ、“プロティベシ (*protibeshi*)”である。地縁で結ばれた人間関係は、バリ・ビティが主要な活動圏である女性にとってはより重要な意味を持つ。村にはグスティ (*gusthi*)、ショマズ (*somaj*) 等のバリを越えた社会組織があるが、⁵⁾ それへの参加意識は自由に村の中を動ける男性の方に強い。また、彼らは日暮れ時などにはバリ・ビティを離れ村の辻々や市で雑談をしながら情報を交換する。その反対に女性たちの日常の助け合い（小銭、調味料等の貸し借り、家事の手伝い等）やおしゃべりは、バリ・ビティ上の地つづきの範囲を中心に行われる。燃料を自給できないような世帯の女性はバリ・ビティを離れ、道々や耕地内で牛糞や稲ワラを集めたり、また貧困世帯の女性は他の世帯での仕事（作物の調製作業、家事の手伝い等）に出たり物乞いをしたりということもあるが、経済的にそのようなことをする必要のない世帯の女性の場合、自分のバリ・ビティを離れることは少ない。

このように、バリ・ビティを持つことは、村びとが村で暮らすにあたって非常に重要な要件であり、村びとがその確保に努力していることがわかる。また、バリ・ビティを軸とした地縁関係は村びとの、とくに女性の日常生活において重要な役割を果たしている。

(2) 村の組織（受け皿）づくりにおける隣組グループ（バリ・グループ）づくり

村での農村開発の試みを行うにあたって、重要な要素となったものが政府のサービスや開発プログラムの受け皿となる村の組織の捉え方であった。受け皿の中心としては、村の伝統的なリーダーたち（マタボール：*matabor*）で構成された村落委員会が据えられた。また、これまで政府や村の開発関連事業等に関する情報が少数の個人に私有化されてきた現状を見ると、まず第一に情報が村びと全体に公開されるようなシステムが必要であると考えた。そのために村びとすべてが含まれる情報伝達グループ（隣組グループ；バリ・グループ）を村落委員会の下部に組織することとした。

隣組グループづくりは、流すべき情報が比較的滞ることなくグループ員全体に広がることを念頭に置いて行うことが重要である。雨季になると村のほとんどが湛水してしまうD村では、雨季と乾季で村びとの移動路が大きく異なる。乾季には隣接しているように見えても、雨季になるとバリ・ビティの間の土地が水に沈んでしまい、人々の往来が非常に困難になることがある。そこで、雨季の生活において村びとたちが一固まりと認識できるようなグループ分けをする必要があった。バリ・ビティの地続き性及び村びとの行き来に注目しつつ、構成世帯は1グループあたり10から15世帯ほどに、そして全体のグループ数はあまり多くなりすぎないように

グループを分けた。

各グループからは輪番性の世話人が男性、女性の双方から一人ずつ選ばれ(*shebok*, *shebika*), 彼/彼女らが村落委員会からの情報をグループ員に伝える責任を負うこととなった。これは前述したように、男性、女性の世界が明確に分けられているために関心事等に相違があり、片方の性だけへ情報を伝えても、その性が関心のないことはうやむやになってしまう可能性があること、また両性を集めるより片方だけを集める方が率直な話し合いができる場合もあるのではないかと考えてである。社会的に表をなすのは男性であるが、バリ・ビティの地続き性をもっとも体感しているのは女性であることから、情報源としての回覧板を回す役割は女性にしてもらうこととした。

(3) 隣組グループづくりを通じてあらわれた、バリ・ビティの持つ意味

隣組グループづくり当時にははっきりと意識されていなかったが、雨季における住居塊の一固まりは、村びとにチャクラ(*chakla*)として認識されていることがわかった。チャクラは特に雨季における居住区域のバリ・ビティの地続きを示したものであり、つまり雨季においても自由にバリ・ビティを行き来できる範囲が自分のチャクラとなる。そのときはチャクラという言葉意識せずにグループ分けしていたが、隣組グループが村びとの生活実感に合った分けられ方をしていることが図らずも明らかになった。

2. Plant Book の編纂を通して知る、村びとの生活とバリ・ビティの植物の関わりの深さ

バリ・ビティを対象とした研究調査や多くのバリ・ビティ利用促進プログラムが実施されているが、外部からの技術導入が先行しがちで、村びとたちの視点から彼らの知識を活かす形で実施されているものは少ないように見受けられる。バリ・ビティの生産・生活技術は村びとの暮らしぶりと深く結びついているものであり、まず彼らがどのようにバリ・ビティを認識し利用しているか、それを知ることから始めることが重要である。そう考えて、Plant Book, すなわちバリ・ビティの植物資源とその利用に関するインベントリーを作成した。

図2にあらわれたようなサンプル地区のバリ・ビティの植生の悉皆調査の後に、バリ・ビティ内及び近辺の植物を村の人たちがどのように認識し、栽培し、利用しているかを、1つひとつの植物ごとに聞き取りをしながらまとめたものである。また、収集された植物の学名の同定については、National Herbarium の植物学の専門家の協力を仰いだ。利用法は村びとのほとんどが知るものから、村の老人やコピラジ(*kobiraj*: 村の伝統的治療師)だけが知っているものまで実にさまざまであり、Plant Book からは単なる植物の利用状況だけでなく、村の人たちの暮らしぶりが浮かびあがってくる。

例えば、村びとたちから *Allad shaper gach* と呼ばれている植物がある。“*shaper gach*” は



図3 バリ・ビティの木々とカチャルを覆い尽くすツル性の野菜
1993年撮影

“へびの木”を意味する。これは *Opuntia* 属の一種と同定された、サボテン科の植物であるが、この植物は蛇の害から村びとを守る役割を果たしていると認められているため、このような名前がつけられているのであろう。Plant Book からその利用法を書き抜いてみよう。

……夜になると蛇は、家畜小屋へ牛の乳を吸いにやってくる。牛の乳首に噛みついて、チュウチュウと吸うのである [これは、翌日牛の乳首に噛み跡が残るのでわかるらしい。牛乳は村びとにとって重要な栄養源であり、またそれ以上に授乳期間中は日々の現金収入をもたらす重要な収入源でもある]。ところで、この *Allad shaper gach* は、蛇が鎌首をもたげた姿に似ている上に、蛇よりずっと大きい。そのうえ刺が一面に生えている。この植物を家畜小屋の裏の、蛇が忍び込んできそうな場所に植えると、蛇は自分より大きな蛇が鎌首をもたげているし、刺で痛いので、恐れて近づかない。また、この植物からコピラジたちは喘息の薬もつくる。その作り方は……

また、狭いバリ・ビティを広く利用するために村びとがどのような工夫をこらしているのかも、この Plant Book から知ることができる。野菜は大半がツル性であり、その伸長の度合いに合わせて屋根の上、竹垣の上、及び木本植物の上を這う形で栽培されている。また、カチャルの土地もバリ・ビティの正面に位置するため、日当たりがよく、特に乾季の野菜の生産地として重要である (図3参照)。カチャルの下部は雨季は湛水するが、上部の湛水しない部分には、価値の高い果樹や木材となる植物が他所から移植される。野菜や果樹には牛糞、調理用燃料の灰や、バリ・ビティ内の生活ゴミを掃き集めたもの (*jhadu*: ジャドゥ) が、肥料として与えられる。なかでもジャドゥは食べ残しや家畜の排泄物等を含んでおり、肥料として重視されている。

表2は上記のようなバリ・ビティの持つ特徴を他の生産地であるケット、パランと比較して

表2 生産の場としてのバリ・ピティ

	田畑	パラシ	バリ・ピティ
1. 生産物			
(1) 農作物	<ul style="list-style-type: none"> ・穀類(イネ, ムギ等) ・油料作物(ナタネ) ・豆類(ケジャリ, ダール等) ・繊維作物(ジュート) 	<ul style="list-style-type: none"> ・イネの苗床 ・ジュート ・野菜 伝統的な野菜, 香辛料(ヒユ, ナス, タマネギ, ニンニク, コリアンダー等) 新来の野菜(ダイコン, キャベツ, カリフラワー等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・果樹(マンゴ, バナナ, パパヤ, グアバ, ジャックフルーツ等25種) ・野菜(33種) 伝統的な野菜(ユウガオ, トカドヘチマ, カボチャ等ウリ類, フジマメ, ササゲ等豆類, ワサビノキ等) 新来の野菜(ツルムラサキ等)
(2) 家畜飼養	<ul style="list-style-type: none"> ・家畜のエサ(ケジャリ, 稲ワラ, ナタネ糟等農業副産物, 耕地の雑草) 		<ul style="list-style-type: none"> ・家畜飼養の場 ・家畜のエサ ・家畜の薬(増乳, 食欲増進, 咳止め等)
(3) その他	<ul style="list-style-type: none"> ・食料(耕地, 道端の野草) ・燃料(稲ワラ, ジュート芯等農業副産物) ・建材(ジュート芯, 麦ワラ等農業副産物) 		<ul style="list-style-type: none"> ・建材 ・家具用木材 ・各種道具材料(農具, 生活道具, 遊具) ・舟の材料 ・薬(胃腸, 寄生虫, 皮膚病, けが, 頭痛, 眼病, 神経痛, 歯磨き等) ・染料 ・防腐塗料 ・燃材 ・油料 ・鑑賞等
2. 特徴	雨季には湛水 外部的	雨季には湛水 半内部的	通年湛水しない 内部的
3. 村びとの関与			
男性	大 全般作業	大 全般作業	中 野菜(購入苗), 果樹
女性	ほとんどない バリ内での調製作業 (貧困な世帯などでは田畑の作業に加わることもある)	大 管理(水やり等) 苗取り	大 野菜(自家採種分), 果樹

出所：聴取調査結果より作成。

まとめたものである。ケットやパラシが少品目の主要作物を、現物としてのみならず多くの場合販売を通して現金の形でもたらすのと異なり、バリ・ピティは多種多様な生産物を、販売もされるが多くは村びとの日常生活の必要に応える形で提供している。さまざまな植物のあらゆる

る部分が食料，燃料，油料，薬用，木材，各種道具材料等多様な用途に利用される。村のハットでの売買には現れてこないようなものも含めた，これらバリ・ビティからの資源によって村びとの生活は支えられているのである。

3. バリ・ビティ，パラン，ケット：農業普及局のバリ・ビティ家庭菜園プログラムを通して知る，野菜栽培及び摂取の意味

(1) 野菜栽培と摂取の現状

バリ・ビティとパランはいずれも重要な野菜の栽培地であるが，その自然条件の違いからその栽培法には大きな違いがある。バリ・ビティは湛水しないため，通年栽培することができる。ここでは狭い面積を広く利用するための工夫がこらされる。野菜は大半がツル性であり，屋根の上，竹垣の上，及び木本植物の上を這う形で栽培される。また乾季には，カチャル，池の土手も重要な野菜の生産地となる。

一方パランは雨季には湛水するため，乾季にのみ栽培される。パランでは男性が中心になって主に「商品野菜」であるカリフラワー，キャベツ等が単一もしくは少品目で栽培される。一面に同種の野菜を栽培することにより，その管理を簡単にし，収穫時期には一挙に販売し現金を得ることを目的としている。これらの「商品野菜」は，バリ・ビティにおけるデシ・ラウ (*deshi-lau* : *Lagenaria siceraria*, ユウガオ)，シーム (*sheem* : *Lablab purpureus*, フジマメ)，ドゥンバ (*dhumba* : *Luffa sp.*, トカドヘチマ) 等の伝統的野菜を少数ずつ多品目栽培するのは，その意味が異なる。これら伝統的野菜はトルカリ (*torkari*) と呼ばれ，まさしく，おかずの材料として (トルカリとは，トウガラシ，ターメリック，コリアンダー等のスパイスで味つけられ，煮込まれた主菜) 認識されている。伝統的に栽培されてきた野菜のうちナス，トウガラシの苗はハット (市) 等から購入することも多いが，その他の野菜は自家採種され，毎年播種される。また，伝統野菜の栽培を担うのは主に女性である。

栽培野菜の外にも村びとは多くの野草を摂取しており，これが食生活において重要な役割を果たしている。多くの野草を子どもたちに集めさせ，調理し食べる。しかし，野草は貧乏人の食べるものであるといった羞恥を感じている人も多く，彼らはこの事実について多くを語りたがらない。このために重要な栄養源でありながら，野草の果たしている役割が外部の研究者やプログラム計画者によっても見過ごされたりする傾向にある [Quddus *et al.* 1991 : 13 ; CIRDA 1990 : 16-26 ; De Torres 1989 : 20-30]。

(2) 農業普及局による家庭菜園プログラム

農業普及局の家庭菜園プログラムは，農業普及局のプログラムを村びとにデモンストレー

ジョンすることに加え、これまでどこに、いつ、何をしに村に来ているかを全く知ることができなかった農業普及局の村レベルのスタッフ (Block Supervisor, BS) の活動が村びとに明らかになり、必要なときに接触できるようにすることも目的のひとつとして実施された。

同プログラムは、国立農業研究所がバングラデシュ西部のパブナ県イシュルディで開発したものであり、6 m×6 m のプロットに年間を通して各種の野菜を栽培し、それを摂取し栄養状態を改善することを大きな目的としている。そのために、6 m×6 m のプロットはさらに5つの畝に分けられ、それぞれの畝に異なった野菜を栽培していくことになる。農業普及局ではこのプログラムを村々でのデモンストレーション・プロットを通して普及し始めた時であったので、D村にもこのプログラムを誘致することとした。

しかしプログラムを進めていくと、村びとの関心が低いままで一向に高まらないことが明らかになった。村びとは、前述のように、野菜を2種類に識別している。ある程度まとまったプロットは村びとにとっては「商品野菜」の栽培場所であり、自給用にはバリ・ビティの小さな空間を利用して栽培される伝統野菜及び、耕地や道端からの野草が摂取されている。このプログラムは、その“村びとの栄養改善”という目的が“6 m×6 m プロットにおける多品目の野菜栽培”という手段においてD村の野菜栽培及び摂取の現状に合致していない点があり、そのために村びとたちに敬遠されてしまっているのである。栄養改善を考えるのであれば、単に野菜栽培を勧めるだけでなく、野草の摂取も視野に入れながらのプログラムが必要であろう。村びとの生活を知り、そこからプログラムを発想するという姿勢が必要である。

4. 果樹挿し木／接ぎ木プログラム：村の内部での資源循環を試みる

耕地が水面下に沈んでしまうD村において、バリ・ビティは木本植物の唯一の生育場所であることは先にも述べた。中でも果樹は木材としてなど他の用途においても利用価値の高いものが多いことから、需要が高く、野菜と並ぶ重要なバリ・ビティ生産物の1つである。

前述のように野菜は前年の種子を採種保存し、次年に利用するが、果樹の場合も実生が中心的な繁殖法である。自分や親戚のバリから採れた果実や、あるいは購入した果実のうちの、美味であったものの種子を蒔くのである。しかし果樹は先祖返り、枝変わり等の変異の可能性が高く、必ずしも甘い果実の種子から育てた木に甘い実が成るとは限らない。また実生の果樹は成長に時間がかかることもあり、その点からも接ぎ木、挿し木、取り木のほうが好ましい。

D村でも、一部の果樹については挿し木、接ぎ木が従来から行われている。レブ (*lebu* : *Citrus spp.*, ライム) については挿し木が簡単なことから挿し木による繁殖が常識になっている。また、リチュ (*lichu* : *Litchi chinensis*, ライチ) やアム (*am* : *Mangifera indica*, マンゴ) といった村びとにとって現金収入源としての価値が高い果樹においては取り木の技術も行われてきたが、成功率が低く、より簡単で確実な繁殖法への潜在的な需要があった。



図4 スタッフのグラフティング作業を傍らで熱心に見ている村びと
1994年撮影

また、これも前段で説明したとおり、バリ内の植物資源は主に自達あるいは親戚からの入手が多い。それに加えて隣人からの贈与も見られるが、それを越える範囲でのやりとりはあまり見られない。そこで隣人意識からより広い村意識 (*grambeshi*：同じ村の住民としての仲間意識) を呼び起こすことにより、村内の植物資源のより活発な循環ができないものかという視点も加えてこのプログラムは計画された。資源は常に外部から供給されなければいけないというものでもない。村の中で、持っている者から持っていない者へ資源を循環させることもできるのではないかと？

実際のグラフティングの作業はプロジェクトのスタッフが農業省の県レベルの園芸センターの協力のもとに、そこで技術トレーニングを受け実施した。果樹を持つ村びとは、ほとんどが自分の果樹の枝を村の他の人に分けることに同意を示し、また、自身もグラフティングによって、自分のバリの植物資源が増えることを望んでいる (図4)。

プログラムの計画の時点では、ペヤラ (*peyara* : *Psidium guayava*, グアバ) やジャンブラ (*jambura* : *Citrus grandis*, ザボン) といった、村に一般的に見られる果樹は村びとの関心を集めないのではないかと心配もあったが、プロジェクトを進めるにつれて需要が十分高いことが明らかになっている。

IV おわりに

バングラデシュでは、バリ・ビティに関してはアグロフォレストリーの視点を中心にしたの研究が進み、また、多くの機関がバリ・ビティ利用を促進するプログラムを実施してきているが、村びとが屋敷地と共に培ってきた技術と生活の知恵を認識し評価した上で行われてきたものは少ないようである。それらは、いわば、村の外でつくられた基準をもとに、「屋敷地の生産地としての利用が不十分である」と外部者が採点し、「であるから外部からの近代技術の導入が

必要である」と判断しプログラムを組み立てるわけである。しかし、本当に屋敷地の利用は低調であるのだろうか、また、このような、バリ・ビティを生産の側面からのみ利用していくという視点だけで本当に十分なのであろうか。

この疑問をもとに、D村ではいくつかのプログラムを実施した。それらは本文で記述したとおりであるが、もう一度要約しておこう。

村の受け皿としての隣組グループ(バリ・グループ)づくりは、屋敷地が農村社会生活において持つ意味を重視し、雨季の湛水期における村びとの日常生活範囲、彼らの持つ基本的な地縁集団に注目して始められたプログラムであった。Plant Book及び農業普及局の家庭菜園プログラムは、前者が村びとたちの技術と知恵を活かしていこうとする一方、後者は外部の研究機関が開発した1つの型を上から普及していこうとしており、そのアプローチの違いは対照的である。バリ・ビティは生産の場でもあるが、それは人々の暮らしぶりに密接に結びついているものであり、まずそれを知ること、そしてそれを活かしていくことがバリ・ビティの利用を推進するプログラムを実施していく上で最も重要なことであろう。グラフティングのプログラムは、簡単で活着率の高いグラフティング技術を紹介し、村びとたち自身による果樹繁殖の活性化に加え、彼らの間で果樹の枝のやりとりを通して資源を循環させる試みでもある。このプログラムは図らずも、外部から新しい資源を導入することに偏りがちな現在の農業普及プログラムに疑問を投げかけている。

バリ・ビティをつくることは、村びとにとって人生における大きな課題の1つである。氾濫原にあるD村では高く土盛りする必要がある。その土盛りの費用に加え、土地がない場合土地の購入費用も必要となり、その額は非常に大きな負担となるが、それでもバリ・ビティは求められている。それは、雨季に「湛水をまぬがれる土地」であるためにさまざまな作業をし、木々や、野菜、草花などの植物を育てることができ、また自由に活動できる唯一の「生活空間」としてバリ・ビティの必要性が、貧富を問わず村びとに認められているからである。単に湛水からまぬがれるための高床式の家屋では満たされない重要な要件をバリ・ビティはもっているのである。

最後に、筆者らがプログラムの実施を通して経験的に把握し得た農村開発に関する「発想」をまとめておきたい。雨季の「湛水をまぬがれる土地」、「生活空間」としてのバリ・ビティの果たしている役割に注目し、再評価すること、すなわち村びとの経験に裏打ちされた、バリ・ビティを中心とした「生活の様式」、日々の暮らしにおいて村びとたちを取り囲む自然環境との関わりを通して培ってきた「生活の工夫」に対して彼らが自信を持てるように力づけることが大切なのではないか。それは、村の暮らしの多面的な価値を積極的に認めていくことに他ならない。今まさに「村からの発想」が求められている。バリ・ビティはその発信源である。

謝 辞

D村での活動に共に参加している日本人メンバーの安藤和雄氏, 内田晴夫氏, 藤田幸一氏, カウンターパートであるバングラデシュ農業大学の Altaf Hossain 教授, Habibur Rahman 助教授, 活動の推進者である D村のフィールドスタッフの Akkel Ali 氏, Shahidur Rahman 氏, Hamid Ali 氏, Momotaz Begum 氏, Raez Uddin 氏, Azim Uddin 氏, BRDB カリハティタナの TRDO, ARDO, その他関係省庁のタナオフィサー及びフィールドスタッフの方々, そして村の人々には活動の計画, 実施, 及び論文作成において多くの協力と助言をいただいた。

国立ハーバリウムの Matiur Rahman 所長, 同学術員 Manzur Ul Kadir Mia 氏, Rezia Aktar 氏には, 採集した植物の学名同定のために多くの時間を割いて協力していただいた。農業省の園芸センターの Dilip Kanti Dash 氏及びスタッフの方々からは, グラフティングのトレーニングの機会を与えていただいた上に, その他多くの技術的な内容について有用な助言と協力をいただいた。

チームリーダーである海田能宏先生には, この論文を校閲していただいた。最後に, このプロジェクトに参加し論文を発表する機会を与えてくださった国際協力事業団に感謝の意を表し謝辞としたい。

参 考 文 献

- Abedin, M.Z.; Lai, C.K.; and Ali, M.O., eds. 1990. *Homestead Plantation and Agroforestry in Bangladesh*. Dhaka: Bangladesh Agricultural Research Institute, Regional Wood Energy Development Programme, and Winrock International Institute for Agricultural Development.
- Aziz, K.M.A.; and Malony, C. 1985. *Life Stages, Gender and Fertility in Bangladesh*. Dhaka: International Center for Diarrhoeal Disease Research, Bangladesh.
- Bangladesh Agricultural Research Council. 1991. *National Coordinated Farming Systems Research and Development Plan 1991-96*. Dhaka: BARC.
- Bangladesh Bureau of Statistics (BBS). 1993. *Statistical Pocket Book of Bangladesh*. Dhaka: Bangladesh Bureau of Statistics.
- Chaudhury, R.H.; and Ahmed, N. R. 1980. *Female Status in Bangladesh*. Dhaka: Bangladesh Institute of Development Studies.
- CIRDAP (Centre on Integrated Rural Development for Asia and the Pacific). 1990. *Kitchen Gardening and Homestead Productive Activities*. Dhaka: CIRDAP.
- De Torres, Alfred B. 1989. *Kitchen Gardening and Homestead Productive Activities in Rural Bangladesh*. Dhaka: CIRDAP.
- Firoz, H. 1994. Rashida's Success Story. *JICA JSRDE Newsletter No.2*. (Dhaka).
- Hannan, H.; and Ferdouse, H. 1988. *Resources Untapped: An Exploitation into Women's Role in Homestead Agricultural Production System*. Comilla: Bangladesh Academy for Rural Development.
- Jalil, A. 1994. Pakchoy White: Successful Introduction of New Spinach. *JICA JSRDE Newsletter No. 3*. (Dhaka).
- 河合明宣; 安藤和雄. 1990. 「ベンガルデルタの村落形成についての覚え書き」『東南アジア研究』28(3) (「バングラデシュの農業と農村」特集): 92-106.
- Mukai, Shiro. 1993. Key Issues for the Development of Fanishair Village and the Action Program Undertaken. Report prepared for the Workshop on Mid-term Review of JSRDE Project, held on 22 Dec. 1993, Bogra, JICA.
- Quddus, M.A.; and Ara, S. 1991. *Nutrition in Rural Communities: With Seasonal Variations*. Comilla: Bangladesh Academy for Rural Development.
- Sultana, Sabiha. 1993. *Rural Settlements in Bangladesh: Spatial Pattern and Development*. Dhaka: Graphosman.